

お薬のしおり

No.99 (H22.2)

子宮頸がんの予防ワクチンについて

東京医科大学病院 薬剤部

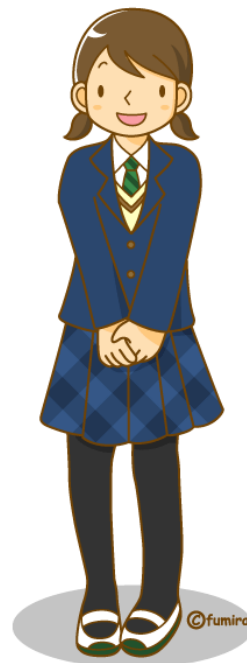
最近「^{しきゅうけい}子宮頸がんがワクチンで予防可能となった！」こんな記事を見かけた人も多いと思います。子宮頸がんは^{いでん}遺伝などに関係なく、性交経験がある女性なら誰でもなる可能性のある病気です。

近年、20代後半から30代に急増し、若い女性の発症率が増加傾向にあります。子宮頸がんは、がんによる死亡原因の第3位、女性特有のがんの中では乳がんに次いで第2位を占めており、特に20代から30代の女性においては、発症するすべてのがんの中で第1位となっています。また、全世界で毎年、27万人もの女性が子宮頸がんによって大切な命を失っています。

子宮頸がんは、最初の頃は全く症状がないことがほとんどで、自分で気づくことがありません。そのため、^{ふせいしゅっけつ}不正出血やおりものの増加、性交のときの出血などに気がついたときには、がんはかなり進行していることがあります。

それでは何故、ワクチンで子宮頸がんを予防できるのでしょうか？それは子宮頸がん発症の主要な原因が、ヒトパピローマウイルス（HPV）というウイルスの^{かんせん}感染で起こるからです。HPVは多くの場合、性交渉によって感染すると考えられていて、発がん性HPVは、すべての女性の約80%が一生涯に一度は感染していると報告があるほどともありふれたウイルスなのです。

子宮頸がん予防ワクチンは、発がん性HPVの中でも特に子宮頸がんの原因として最も多く報告されているHPV16型と18型のウイルスに対する免疫をつくらせ感染を防ぐワクチンで、海外ではすでに100カ国以上で使用されています。



接種方法としては半年間の間に3回：初回、2回目（初回の1カ月後）、3回目（初回の6カ月後）腕の筋肉に注射します。

このワクチンの接種対象は10歳以上の女性です。ただし下記に該当する場合は接種ができません。

- (1) 明らかに発熱がある
- (2) 重篤な急性疾患にかかっている
- (3) このワクチンの成分に対して過敏症を示したことがある
- (4) 先生がワクチンを接種すべきではないと判断された場合

また、妊婦又は妊娠している可能性のある女性の接種は妊娠終了まで延期する、また接種期間の途中で妊娠した際には、その後の接種は見合わせるものとされています。

このワクチンを接種することでHPV 16型とHPV 18型の感染を防ぐことができますが、全ての発がん性HPVの感染を防ぐことができるわけではありません。そのため、ワクチンを接種しなかった場合と比べれば可能性はかなり低いものの、ワクチンを接種していても子宮頸がんにかかる可能性はゼロではありません。

このワクチンは、すでに今感染しているHPVを排除したり、すでに起こっている子宮頸部の前がん病変（がんになりかけている細胞）やがん細胞を治す効果はなく、あくまで接種後のHPV感染を防ぐものです。

子宮頸がんを完全に防ぐためには、子宮頸がんワクチンの接種だけでなく、定期的に子宮がん検診を受けることが大切です。ワクチン接種後も、1～2年に1度は子宮がん検診を受けるようにしましょう。

子宮頸がん予防ワクチン（商品名：サーバリックス）は自費扱いになりますので、医療機関によって料金が異なります。直接、医療機関にお問合わせください。当院でも3月中旬から取り扱う予定です。

